

何が逃げ恥を社会現象としたのか

量的な現実度測定とドラマが保有する価値観の質的分析から

概要

世界経済フォーラムから毎年発表される「ジェンダーギャップ指数ランキング」の日本の順位の低さは近年特にメディアで取り沙汰されることが多い。ここ数年のジェンダー問題に対する人々の関心が高まっていることの表れであろう。順位が発表される度、毎年様々な議論がなされるがその一方、日本は順位を大きく上げることが未だかつてない。依然として先進国の中でも最低レベルとなっている。人々のジェンダー、ひいては人権に対する関心が高まり、性によって権利や機会が奪われてはならないという考え方は共有された普遍的な概念となっているが、日本のジェンダーギャップが埋まらないのはなぜなのか。

この疑問に対する一つの答えを提示したドラマが『逃げるは恥だが役に立つ』である。本作品はこれまでジェンダーについて議論がなされる際にあまり取り上げられてこなかった家事労働や女性の生きづらさといった問題に焦点を当て、女性のみならず男性からも人気を博し大きく話題となった。「社会現象化した」と評されるまでに至ったのは、人々のジェンダー問題に対する関心と本ドラマのテーマとするものが共鳴した結果であると考えられる。

本論文では、ドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』の描いたものがいかにして視聴者からの人気を博し、社会現象化するに至ったのかを検証することを目的とした。

検証するにあたり、

1. 『逃げ恥』は高視聴率であることから、その現実性は高くなっている

2. 同様に、高視聴率であることから、ドラマに盛り込まれている制作陣の価値観や人間観

は放送当時の社会に生きる人々のそれらとリンクしている

3. 人々に語らせるような何らかの要因を含んでいる

という三つの仮説を立て、登場人物分析とシーン分析を用いてドラマを構成するものがどれ

ほど現実的であるか測定・考察し上記の仮説検証を行った。

最終的に、このドラマは現実的であり、それゆえにより多くの人の共感を呼ぶことを可能に

し、また取り上げられる事柄が家庭や個人という私的領域においてのものであるが故に人々

に語らせ、社会現象となるに至ったのではないかという結論を出すことができた。